

『男色大鑑』の表現と方法

——巻一の五「墨絵につらき剣菱の紋」を中心に——

平* 林 香 織

長野県の戸隠神社奥社入り口そばに戸隠忍者資料館がある。寿永三年（一一八四）に北安曇出身の仁科大助が興して以来、現在に至るまで八〇〇年の時を超えて受け継がれてきた戸隠流忍法⁽¹⁾に使われる道具の様々が展示されており興味深い。始めてそこを訪れたとき、河や湖沼をわたるための浮き具「水ぐも」とならんで展示されていた「たたみ舟」に強く心引かれた。「たたみ舟」は携帯用の舟で、桐や樺等の軽い材質の木で作る折り畳み式の箱形の舟である。人の両足がかるうじてはいるほどの大きさで、およそ舟のイメージからはほど遠いものである。これに乗って水の上を進むためにはどれほどの修行と技術が必要だったことだろう。

『男色大鑑』巻一の五「墨絵につらき剣菱の紋」に登場する嶋村大右衛門は、仕官に際して「たゝみ船」を提示し、薩摩藩で二百石の知行を得る。

挟箱にたゝみ船を仕込。取組は三人乗て。大河を越にためしあり。自然の時は用にも立ぬべし。其外浮沓棒火矢を申立に。御合力分式百石くだしおかる。⁽²⁾

ここでの「たゝみ船」は、「三人乗」で、「大河を越にためしあり。自然の時は用にも立」という規模のものであるから、戸隠流の忍者たちが使用したそれよりも大きなものだったと思われる。

また、戸隠の忍者資料館には、矢の先に火薬を詰めるための小さな筒を取り付けた簡単な構造の「火矢」も何本か展示されているが、大右衛門が所持していた「棒火矢」は、やはりもっと大がかりなものかと思われる。ちなみに、『和漢三才図絵』巻二十一「兵器 征伐具」には「火箭」について次のように記されている。⁽³⁾

按ずるに、火箭に数品有り、相伝へて云ふ、寛永年中防州赤石内蔵助始めて棒火箭を作る、而して後（播州三木茂太夫、紀州寺島甚助、氏田右衛門、其外諸家、名を得し者多く有り）工夫を以つて改作す。故に異同有り。以つて家伝と為す。凡そ百目玉を大銃に容る可く、火箭を嵌めて打出せば、則ち廿三四町に致す可し。中る所焼けざること無く、消すこと能はざるの攻城の重器なり。但し玉の代りに送りの木を入れ、薬を込めて打つこと常の如し。（傍線引用者、以下同じ。）

この記述を参考にする限り、「棒火矢」は、「家伝」にするような貴重な武器でもあり、しかも「中る所焼けざること無く、消すこと能はざるの攻城の重器」であり、攻撃力破壊力に勝れた武器だと考えられる。つまり、「近世の水軍の案出による」⁽⁴⁾という

「たゞみ船」のほか「浮沓」と「棒火矢」を所持していたことを考えると、大右衛門は、特殊な武器を所持し、しかもそれを使いこなしている人物として設定されていることになる。

『男色大鑑』を読み進めるに際して、男色そのものが西鶴の色道観のなかにどう位置づけられるかということを考えることも重要であるが、それは、作品に何がどう書かれているかということ（⁶）を明らかにするための『男色大鑑』一話一話の再検証（⁶）には考えられないことである。本稿はその試みの一つとして、巻一の五「墨絵につらき剣菱の紋」についてその表現機構を検討することによって、西鶴の表現方法の一端を明らかにしようとするものである。

一

以下に示すのは、『男色大鑑』巻一の五「墨絵につらき剣菱の紋」の冒頭部分である。

挾箱にたゞみ船を仕込。取組ば三人乗て。大河を越にためしあり。自然の時は用にも立ぬべし。其外浮沓棒火矢を申立に。御合力分式百石くだしおかる。長の浪人なれば先相勤め。兼ての望は時節と待年もはや。二十七歳になりぬ。さしつぎの妹は丹波の笹山にありしが。夫に離れて後世を捨て。河内の国道明寺に。十九の夏衣を墨に染し以来。身の取置の便もなかりしに。過つる五月比音信の文書で名物の花粉などを送る。心ざしは万里に届きて。今児島の水に浮て。折ふしの暑さをし。汗は泪に替り。むかしをおもふ振袖の面影。地紅の帷子を好て着た物をとなげきぬ。其次の妹は十四歳になりて。いまだ定まる縁もなく老母と一所に引越。しらぬ国里の住るも。武士の身ほど定めがたきはなし。若年にて父におくれ

しに。嶋村大右衛門といはるゝも。是皆母人のはたらきあたにも存ぜず。朝の嵐をいたはり。夕の御寝間もすゑの女の手には懸ず。妹とも是を見習ひ。真綿引きして御枕などまいらせ。丸絆の帯数珠袋をも。置所あらため孝をつくせり。人の親はかく有べき事なり。

先にも述べたように「たゞみ船」や「浮沓・棒火矢」を所持し、使用できることなど、忍術めいた武芸を身に備えている人物が、兵器をセールのポイントにできたのは、士族の人口が圧倒的に多く「死ヲ以テ表トシ唯男子ハ死スルヲ道トス」というような風潮が広がっていた鹿児島が、「いわゆる武張った土地柄」であったことと関連するだろう。彼は、長年の浪人暮らしにひとまず決着をつける。彼には「兼ての望」があったが、二十七歳にもなったことであり、仕官に際しそれをかなえるのは別途時節を待ってということにする。いかにもいわくのある影を持つ男として描かれている。

上の妹は、丹波笹山に嫁いだものの、何らかの事情で夫と離縁し出家。どういう事情からか、一家とは長い間音信不通のままだったが、「過つる五月比」河内の道明寺から便りがあって一家の心配事が一つは解消される。彼女も兄同様、人生の複雑系の中に取り込まれていることが示される。母と暮らすのは大右衛門と下の妹である。十四歳になって「いまだ定まる縁」もない下の妹と兄大右衛門とは、幼少時に父に死に別れて以来、「定めがたき」「武士の身」を保ち一家を支えた母に対して、模範的な孝を尽くしている。

このように、冒頭部分では、謎を共有する家族同士が、静かにしかし意志的に、肩を寄せ合って暮らしていることが描出される。ここを読む限り、作品は、嶋村大右衛門が「兼ての望」をかなえ

る経緯を物語るものとして展開していくようにも思われる。ところが、結局、大右衛門の「兼ての望」がなんであったのかは作品の最後まで書かれない。

幼少時に父親がなくなったという記述や、出家して音信不通になっていった妹からの便りを喜ぶくだりなどから、わけ有りの一家が畿内から鹿児島へ流れてきたことがわかる。大右衛門の「望」とは、父の死に関連することがらではないか、さらにいえば仇討ちを果たすことではないかという予想も成り立つ。

ちなみに、本話に続く巻二の「形身は貳尺三寸」は仇討ち話に衆道の美学が重ねられた話であるが、主人公勝弥が十八歳になって反古の中から発見した六年前の母の遺言には、「女の身ながら。本望をとげぬべしと。思ひ極めし甲斐もなく。相果る時の無念さ。哀成人の後。此所存はやくやめさせ。草葉の陰の父母によるこぼされよ」と綴られていた。ここでいう「本望」とはもちろん夫の敵を討つことである。

仇討ち話を多く扱う『武道伝来記』『武家義理物語』には「哀や年来のうき難義母迄に後ながら本望は遂たれ共賤しき者の手にかゝりて果しをかたりつたへてあはれなり」（『武道伝来記』巻四の三「無分別は見越の木登」）、「小吟身にのぞみあるゆへに人の氣をとり勤めければ」（同巻六の一「女の作れる男文字」）、「父をうつたる者。相しるゝ節。此本望をたつすべし」（『武家義理物語』巻六の三「後にそしるゝ恋の闇打」）などいくつかの「本望」「望み」の例があり、すべて敵を討つことを意味している。武士の仇討ちをテーマとした作品の場合、「望み」が肉親の敵を討つことを意味するのは当然のことであろうが、「墨絵につらき剣菱の紋」の場合には、前後の文脈には具体的な経緯がまったく書かれていないので、「兼ての望」が父親の敵を討つことだと断定

できない。いずれにせよ、なんらかの過去がある人物という点で読者の注意を喚起する叙述になっていることは否定すべくもない。一般的には、このように冒頭部分に謎あるいは解決すべき問題が用意されている場合、その謎を解き明かしたり、問題を解決する方向で話が展開していく。

たとえば、仇討ち話巻二の「形身は貳尺三寸」の場合がそうである。

右に見たように、母の遺言には、十三歳になったら父の敵竹下新五右衛門を討つようにと書かれていた。ところが既に十八歳になっていた勝弥は大殿の寵愛を受ける身となっており、大殿は勝弥に「御家の大事。若殿様にも仰せわたされぬ御事共迄。仰せきけられ」るほどであった。これでは、敵討ちを申し出ても許可されないところであろうが、たまたま、殿が千川森之丞に心変わりしたために敵討ちの申し出が可能となったことを勝弥は喜ぶ。母の遺言発見前に殿の心変わりを知って自害をしようとした勝弥であるが、母親の遺言を見た以上、敵討ちに出ないわけにはいかない。諸国を経巡りながら西国に下る途中で再会しかつての朋友片岡源介の力を得て、漸く敵討ちに成功、源介勝弥は「まことの兄弟分」となる。

巻二の「問題解決型」の話であるのに対して、巻一の五は問題を留保したまま新たな局面が展開する話となっている。「兼ての望は時節と待年もはや。二十七歳になりぬ」という言い方は、二十七歳になるまでの時間の流れを含み込んで大右衛門のこれまでの人生と現在の状況の因果関係を暗示するものになっている。

このような、その内実は読者に対して知らせないといういわば因果を含んだ表現を経て、丹之介毒殺未遂事件へと記述が移り、さらにその後大右衛門誤射事件が発生する。

以下その叙述について本文に即して見ていこう。

二

有時大右衛門深沢といふ所に暮をいそぎて。蚩見に行に町はづれなる野辺に。一村の薄花菖蒲の茂り。道ばたよりは見渡し近く。小細水の涌出る埋れ井有。其脇に大師の作といひ伝へたる。石地藏ましまして。人心ざしの日は此所に参詣で水を手向ぬ。爰通り合す折ふし。侍の小者らしき男。新らしき文篋ひとつ懷より取出し。彼石仏の前に置。跡先を見合。覚へて忘れゆく風情。いかさま様子もあるべしと。其男を追懸あ。の箱は何とて態は捨置ぞと尋ねければ。恐れて返事もせず。にげて行。是くせ者ととらへて。里遠き野寺に引込。色く責ても子細をいはず。重てのあやまりはかへり見ず。早縄を懸て。迷惑がる住寺に預けて。右の文箱を取に帰るに。はや里人不思議の貪饒をして。其ま奉行所にあがりぬ。

冒頭部分で紹介されたいかにも謎めいた印象の大右衛門が、新たな謎に関わっていく。傍線①②③は謎に対する登場人物の思いや行動を示した表現である。ここでの不明は具体的な事件の展開に即したものであり、冒頭部分の「兼ての望」がその内容を不明とするのとは異なり、やがて不明の内容が明らかにされるはずのものではある。しかし、謎解きは容易には行われない。

文箱の中には「御内談申せし毒薬進上申候。早々彼者どもに御あたへ有べし。此状御内見あそばして後。火中」という文面並びに「丸の中に剣菱の紋所」を記した手紙と毒薬とが入っていた。その紋が、春田丹之介の常紋だったことから、丹之介はお上に呼び出され詮議を受ける。以下謎の内容を詮索する表現に傍線を、謎の内容を明かす表現に波線を付す。

竊に呼よせ様子を聞ども。聊身に覺のなき大事を引請。先門を閉ける。大右衛門聞付彼男を。夜更て丹之介門外の駒よせに捕付。此度の文箱の子細は。此者存候と張紙してかへる。既に夜明て見るに。此男舌喰切むないうなれども。其形は隠なく岸岡龍右衛門下人也。さてはと御貪饒ある時。はや龍右衛門屋敷を立のき行方しらず。其後丹之介をめして。思ひ当りたる事も有かと。御尋ねあそばしけるに。何の事も存じ寄らざるよしを申あぐる。此分にしては不埒におほしめせども。龍右衛門国遠身に謬りのあればなり。重ねて見合次第に申付べし。丹之介は別義なく。御奉公を相勤めける。其時過てうらなく語る友の尋ねけるに。隠さず申は兼て龍右衛門。我に執心の書通千度なれども。かゝるあさましき心底見極め。取あげざる恨みに。よしなき事をたくみぬ。されども恋よりの悪事なれば。此上ながら御前世間をつゝむと咄せば。婀娜心入感じて自然と沙汰して。若道の随一と申も愚なり。

丹之介は、事件に関して、後の告白にあるように、身に覚えがあった(波線部c)が、若道に関わることだったために主君への遠慮から世間をはばかり(傍線部⑧)、二度に及ぶ取り調べに対して知らない風を装う(傍線部④⑦)。大右衛門は事件の鍵を握る人物として下人を突き出し(傍線部⑤)、謎解きに一役買う。その結果岸岡龍右衛門が関係していることが判明する(波線部a b)。しかし、龍右衛門と丹之介の關係が具体的にどういうものかは、下男が自害し丹之介も口を閉ざしているために不明のままである。その後丹之介が友人に事実關係を打ち明けた(波線部c)ことから、自然に人々の知るところとなる(波線部d)。

このようにひとつひとつパズルのコマを当てはめていくようにして、段階的に事件の全容が明らかになってくる。しかし、丹之

介にとつては、龍右衛門を捕らえ突き出してくれた恩人が誰であるかが不明のままである。謎の一部を引き継ぐことで、大右衛門と丹之介の出会いの場面が用意される。

丹之介は、「我をかなしむ。此者門前につれて書付おかれし御かた。色く思案めくらすれども。しれざる事をなげき。諸神をいの事大かたならず」という状況である。知りたいという欲求に彼の生活が支配されている。そのような彼の前に謎を解くチャンスが巡ってくる。

其秋冬心懸りに暮て。明の春山く雪も松を見せて。日影に水かさまさりて。常なき滝を谷合に見て。細川のすゑに扇網手毎に。小鮎汲も慰みとて行に。片里近き野辺に。色よき娘を母の親の先に立て。はしたましりに茅華土筆雞腹摘など都めきたる様子者。しばしは見るに。其人もこなたに目は隙なくありしが。何か囁やきて。小硯に筆をそゝぎ懷紙に書くよし。草の葉末にむすび捨て。岩の陰道の奥ふかく入ぬ。其筆の跡ゆかしく立寄て読に。此野も人のしげく是より。藤見寺の南の山原に御入候。大あもんさまと書しは。跡より来る人にしらすべきためぞかしと。心を付て見る程女筆ながら。④日外の手にいき移しなれば。不思議と詠むる処へ。大右衛門来つて。此書付とつて行に言葉懸る。

丹之介が鮎を掬いにやってきて土地の者とは違うわけの有りそうな嶋村母娘（傍線部①）に出会う。傍線部②③は母娘が人目を忍ぶ様子を表現しており、冒頭部の嶋村一家の謎めいた雰囲気と呼応するものである。また、自然の風物を求めて外出し、わけ有りげな人物に出会って目を止めるという状況は、大右衛門が蜚見に出掛けて偶然挙動不審の岸岡龍右衛門の下男に出会う状況に類似する。謎めいた一家の様子に、謎解きのパターンが重ねられる。

謎解きの流れは、嶋村一家にまつわる謎ではなく、丹之介にとつての謎を明らかにする方向に向けられているが、冒頭部に呼応して重ねられた謎の二重構造が、場面に緊張感をもたらしている。

丹之介は大右衛門妹の筆跡が、下男に添えられた貼り紙の筆跡と極似していたことから、捜査に協力してくれたのが大右衛門であることを知る。ほどなく母妹を追ってやってきた大右衛門に事情を聞いて謎が氷解し、二人は「互ひに思ひ初。何のかためもなくおのづと。念通の親しみ忍ひく」に。丹之介屋形のうらなる大河を越てかよ」うようになる。ここに新たな秘密の共有関係が成立する。大右衛門一家にまつわるミステリアスな部分が一層その度合いを強くしたといえよう。

さて、「丹之介屋形のうらなる大河を越て」丹之介のもとに通う大右衛門は、水鳥に誤認され遠矢の的となってしまう。事件当夜丹之介が「夢野の鹿」の故事と相通する夢を見て、大右衛門の身の上を案ずる場面が作品の最後の山場となっている。

大右衛門忍び姿岸のむら声の陰に着物ぬぎ捨脇差一腰となつて。思ひ川をこす浅心にあらねば。瀬のはやき時には情の浪肩をこし。魂しづむ事幾度か。漸石垣に取つき。約束の細引をたよりに。是ぞ恋の道しるべにして。切戸に立寄ば。手懸り程あけかけ。燈もほのかに物静なるは。いつに替りてと。すこし聞合す時。内より丹之介障子けはしく引あけ。夢にしても今のは悲しやと。独言申て泪をよるなるに。大右衛門と申せばうれしやと。ぬれ身そのまゝ肌着の下に巻込られ。是にうき事をわすれ。最前の御悔は何とたづねければ。今宵は待も一入に久しく。九つの時計を聞寝入にして間もなく。御身わたらせらるゝ川中に。流れ木御足本に横たへ。此難義にて惜き御命の捨て。はかなき夢はいつの世に。誰見初てう

たてし。海渡る妻鹿のむかしの事迄も思ひ出さるゝと。又泪にしづむ

大右衛門が川を渡って丹之介に会いに行き、大右衛門が川を渡ることに関して、丹之介が不吉な夢を見て大右衛門の死を予感するという設定は、夢野の鹿の故事を利用したものである。丹之介自身が「海渡る妻鹿のむかしの事迄も思ひ出さるゝ」と述べており、夢の内容そのものよりもそれによって「海渡る妻鹿」のことを思い出していること自体が、不吉なイメージを与えている。右の引用の前半部分は、大右衛門が川を渡る様子を描写したものであるが、「思ひ川をこす」「浅ひ心にあらねば」「情の浪肩をこし」「魂しづむ事幾度か」のように、大右衛門が浪にもまれながら深い川を渡る苦勞と恋の思いの深さを二重写しにした修辭的感傷的な表現になっている。それは、大右衛門の身を案じながらその来訪を待つ丹之介の不安、不吉な夢、夢野の鹿の故事と響き合い、その結果、不吉な予感的中と秘密の恋の終焉を暗示する悲觀的な場が作中に形成される。

『摂津風土記逸文』によると夢野の故事とは次のようなものである。

摂津の国の風土記に曰はく、雄伴の群。夢野あり。父老の相伝へて云へらく、昔者、刀我野に牡鹿ありき。其の嫡の牝鹿は此の野に居り、其の妾の牝鹿は淡路の国の野島に居りき。彼の雄鹿、屢野島に往きて、妾と相愛しみすること比ひなし。既にして、牡鹿、嫡の所に來宿りて、明くる旦、牡鹿、其の嫡に語りしく、「今の夜夢みらく、吾が脊に雪零りおけりと見き。又、すすきと曰ふ草生ひたりと見き。此の夢は何の祥ぞ」といひき。其の嫡、夫の復妾の所に向かむことを惡みて、乃ち詐り相せて曰ひしく、「脊の上に草生ふるは、矢、脊の

上を射む祥なり。又、雪零るは、白塩を矢に塗る祥なり。汝、淡路の野島に渡らば、必ず船人に遇ひて、海中に射死されなむ。謹、な復往きそ」といひき。其の牡鹿、感恋に勝へずして、復野島に渡るに、海中に行船に遇逢ひて、終に射死されき。故、此の野を名づけて夢野と曰ふ。

「妾の牝鹿」の住む淡路の野島に通う牡鹿を制するために、偽りの夢合わせをした「嫡の牝鹿」の言葉通りの最期を遂げる牡鹿である。それが「詐り相せ」であるにもかかわらず、現実がその通りになってしまったというこの故事は、言霊としての言葉の力が確かに存在した古代的な発想に基づいているといえよう。そして、恐ろしい言霊を發してしまった「嫡の牝鹿」の切なく苦しい胸中と、それを知りつつ「妾の牝鹿」に逢いに行かずはいられなかった牡鹿の「感恋に勝へ」ぬ心情とがぶつかり合ったところに發生した悲劇的な恋の物語であるということが出来る。夢告として夢そのものが未来を予言したのではなく、夢合わせのことばが未来を決定したところに、この話の悲劇性がある。

それに対して、大右衛門と丹之介との間に生じたできごととは、どちらかという夢を現実当てはめてしまったものといえる。川を渡って恋人に会いに行くという点は、夢野の故事と共通するが、夢野の牡鹿が獵師によって狙いすまされた上で射殺されるのに対して、大右衛門の場合は、誤認であり、即死したわけでもない。矢傷が致命傷であったかどうかともわからない。夜半のことでもあり、相手は水鳥と思ひこんでいる。ましてや自力で自宅へ帰ってきたわけだから、二人の中が露見する恐れは少ないといえよう。自分の夢を夢野の鹿の故事と結びつけておびえる丹之介の言葉に操られるようにして、大右衛門は、發狂を装い、自害しているが、その行動には、死に急いだ印象が強く残る。

ともかく、発狂を装っての自害という大右衛門最後の秘密の仕掛けが施される。しかし、大右衛門の死の謎は残された武右衛門の名入りの矢から容易に解き明かされる。かたや、丹之介は大右衛門の墓の両脇に自分と藤井武左衛門の名前を記した卒塔婆を立てて武左衛門を呼び出すという最後の仕掛けを用意する。「御不思議尤と」、「いぶかしがる武右衛門に対して謎解きをして」、「近におぼしめしの外の御仕合ながら。うちはたしてたまはれ」と果たし合いを挑んで刺し違える。

ところで、大右衛門が「丹之介屋形のうらなる大河を越て」丹之介のもとに通っていたという記述から想起されるのは、冒頭の一文である。

挟箱にたゝみ船を仕込。取組ば三人乗て。大河を越にためしあり。自然の時は用にも立ぬべし。

大右衛門が所持していたはずの「たゝみ船」やそれを操る技術はまったく役にたたなかったことになる。「丹之介屋形のうらなる大河を越て」通っていたと、あえて「大河」と書かれていることが、冒頭部分との照応関係を示唆している。ここで、大右衛門の仕官に際して有効だった「たゝみ船」の存在が無意味なものになっていることは、丹之介と念友関係を結ぶことによって主君を裏切った大右衛門の行動が、既に主従関係を度外視したものであったことに連動している。染谷智幸氏は、男色は、「女色が結婚という制度や遊郭という囲い込みの形で、家や幕府・藩などの公権力に取り込まれがちであった」のとは対極的な構造をもち、世俗的な権力が介入しえない自由な恋愛の展開を可能にするものであると指摘しているが、この話における男色も公権力から切り放されてはじめて成立するものだったといえよう。

そして、このような「男色の無縁性」⁽¹⁾という側面は、冒頭部に

示された大右衛門を巡るもうひとつの人間関係、つまり、家族関係を断ち切っていく。前節で見たとおり、大右衛門は、父親亡き後女手一つで子供三人を守り育てた母親にとって「かく有るべき」孝行息子であった。しかし、弓稽古中の藤井武左衛門の遠矢に横腹を射抜かれて自害する大右衛門は、丹之介の身を守ることのみ考えるひとりの念者でしかない。当然のことながら、母や妹への配慮は一切無い。しかし作者は母と妹の嘆きを確かに記している。

明の日国中に沙汰せり。丹之介かけ付様子を聞に。母妹のなげき目もあてられず。命有ゆへにうき事も見しと。死人に取つき刀に手を懸し事。二三度もせしが心をしづめ。其矢はと取あげ見れば。藤井武左衛門としるせり。さては此敵うたではと。愁にしづみ立帰る

ひっそりと暮らす母妹にとって、「国中の沙汰」となった大右衛門の自害は、考えられないことであつたろう。丹之介が大右衛門と出会う場面、大右衛門の死の場面と、重要な局面には必ず母と妹の描写が差し挟まれる。作品の表現は、常に冒頭部のベールに包まれた大右衛門の一家の謎めいた様子へのフィードバックを促している。そのわけありげな様子とは、「兼ての望は時節と待年」という表現に集約されるものであり、しかも、それはベールを剥がしてその実体を見極めるべきものではなく、ベールに包まれていること自体が意味を持つという類のものであった。

公権力との関係性を断ち、家族の枠からもはみ出して男色に生きる大右衛門が、有縁な人間関係を捨てた時点で、有縁な関係性故に抱いていたであろう「兼ての望」も無化されてしまったのではないだろうか。一つの望みを胸に抱き続けてきた自らの過去の人生の時間を無化した大右衛門は、その望みをかなえる「時節」、

つまり、自らの未来さえも無きものにしてしまう。男色に生きることが、この話の中では、そのような切実なものとして描かれている。

水鳥と誤認されて射抜かれることが原因で自殺するという大右衛門の人生は、「兼ての望」を叶える時節を待ちながらそれが叶わないままであったという事実を含みこんでいることで、それが無い場合よりもはるかに陰鬱のあるものとなっている。謎が塗り重ねられていった挙げ句大右衛門はあっけなく生涯を閉じる。終わってみると大右衛門の一生は何だったのだろうという感慨が強く残る。ここで強調すべき点は、冒頭部分で、大右衛門をとりまく状況を提示する方法が、その後の展開と違和感を持つほどに詳細かつ重点的なものではなく、かといって、読みに不必要なものとして切り捨てられる程軽い付加的なものではないということである。

浅野晃氏がいうように、「偶然に支配される不安定で、変わり易い人間の運命的な悲喜劇の把握という小説的主題」を『男色大鑑』に読みとるとすれば、本話もいくつかの偶然の重なりによって大右衛門の趨勢が移っていくプロセスを描いたものともいえる。丹之介が武左衛門に投げかけた「近比おぼしめしの外の御仕合ながら」という言葉は、そのまま、大右衛門の人生に当てはめることができる。

三

西鶴の表現機構という観点から、内容を明示しない不透明な表現の有効性を示すものとして、この部分にあえて重点を置いて作品を分析してきたわけだが、本話の眼目が、岸岡龍右衛門によるジョッキングな丹之介毒殺未遂事件の功労者大右衛門と、春田丹

之介とが念友関係を結ぶ経緯とその後の展開にあると考えるならば、大右衛門の「兼ての望」が何であったかということは、ストーリー展開上不問に付して差し支えない事柄と考えることもできる。⁽¹⁴⁾ かりにこの言葉を読み飛ばしたとしても作品の内容理解にはそれほど支障をきたすことはないかもしれない。

しかし、西鶴は、たとえば『西鶴諸国はなし』巻二の三「姿の飛乗物」において、因果関係のまったくわからない飛乗物が出没する怪異話に対して「因果」という小見出しを付けるという逆説的な表現方法をとる。この話は、ひとつの出来事の背景や原因がわからないことを描きつつ、そのわからないことがらにも実はわれわれの預かり知らない因果関係がかならず有るということを示し、しかしそれは決してわれわれにはわからないことであり、わからないことそのものが怪異として突きつけられているような話である。西鶴の浮世草子の中で「不思議」と言う語がもっとも多く用いられている『西鶴諸国はなし』では、数多くの不思議が人智を超えたものとして描かれ、様々な形で読者の想像力を刺激するという方法がとられている。

作品において西鶴が読者に提供する情報の透明度というものを考えた場合、透明度一〇〇パーセントと〇パーセントを二つの極としてさまざまな情報提供の在り方を想定できる。透明度一〇〇パーセントの情報提供とは、すべての読者にとって内容が明らかにされている情報である。不透明に限りなく近い情報としては、たとえば、作者でさえあきらかにしらぬ登場人物の不可解な行動というものを想定することもできよう。

『好色一代男』巻一の「けした所が恋のはじまり」で主人公浮世之介の出生に関して説明する部分で、作者は、「此うちの腹より、むまれて世之介と名によぶ。あらはに書しるす迄もなし、

しる人はしるぞかし」と意味深長な表現をしている。周知のように西鶴はしばしば「ぬけ」という俳諧由来の手法⁽¹⁰⁾によって「知る人ぞしるぞかし」といった類のこと、すなわち、楽屋落ち的であったり、少し危ないものであったりする事柄を、露骨にはそれとわからないように作品中に盛り込む。このような「知る人ぞしる」情報は、透明度がそれほど高くない半透明なものとしてイメージすることができるといえる。「ぬけ」においては、楽屋落ちにおける楽屋の広さがどの程度かによって、情報の透明度が決定される。つまり、その場合、情報がなんであるかということ以上に、どの範囲まで明らかな情報であるかということの方が意味を持つこともあり得るだろう。

このような観点で巻一の五の「兼ての望」という表現を考えるならば、ここでは、「しる人ぞしる」という楽屋落ち的な不透明感ともまた異質な不透明な表現であると認識することができる。つまり、不透明な情報であることそのものが意味を持つ表現とは考えられないだろうか。「兼ての望」の内容がはつきりしていないことで、自殺にいたる大右衛門の人生の複雑で不可解な側面が描かれる。

『男色大鑑』には、「少年のむかしは四国にならびもなき美形なり。名は松山に高し。子細有て浪人の首尾よく。間もなく先知六百石にて済ぬ」(巻三の五「色に見籠は山吹の盛」)というように「子細」という語を用いて、登場人物のプロフィールを必要最小限の表現で述べる場合も多くあるが、巻一の五冒頭部の表現はどのような無駄を省くための表現とも異質なものと考えられる。

巻一の五同様に、不透明な情報のもつイメージ喚起力が作中で有効に機能したものととして、巻六の二「姿は連理の小桜」の表現を見てみよう。

巻六の二「姿は連理の小桜」は、「あかず詠めは姿の花若道のさかり」と評される小桜千之助をめぐる『男色大鑑』後半部の話で、次のような四つの内容から構成されている。

- ① 千之助の美しさと人気が
- ② 千之助の愛染明王への祈願
- ③ 千之助の口上
- ④ 備前の人の千之助への立文と恋の成就

まず①において千之助の美しさは、外面的なものだけではなく、内面的にも、身持ちが堅く、「逢ねはしれぬやさしき事」を多く備えた人物であることが紹介される。続く②では、役者が四天王寺の愛染明王を信仰していることが指摘される。四天王寺の法師が仏前を掃除していて、ネズミに食い荒らされた千之助の願状を発見する。そこには「自存する子細有」によって、五年我ながらならぬ事のみ大願成就の内にかく此身を清め畢ぬ」とあった。

さて、ここに書かれている「自存する子細」とはいったい何か。「大願成就」するまでは堅く身を守ると願をかけた、その大願とは何か。鼠にかじられ切れ切れになった願状からは、それを知る術もない。それを法師と共にのぞき込んでいる「折ふし参詣し」た人物がいる。それは、『男色大鑑』巻一の「色はふたつの物あらそひ」に登場した「浅草のかた陰にかり地をして」「一切衆道のありがたき事。残らず。書集め。男女のわかちを沙汰する」⁽¹⁵⁾男である。「まことある心からにやと。いと殊勝に思はれける」という願状を見ての感慨は、千之助の真摯な態度そのものにむけられたものである。ここでは、大願がなんであるかということよりも、五年間の禁欲を自らに課す千之助の生き方に賛辞が送られている。

続く③では、舞台の上で千之助が、「我心中に大願あつて。隔

夜に通夜をいたす」と、自ら四天王寺の願文を思わせる発言をする。「其心ざしは我身にふかいおもはくが御ざりましたれ共」「引わかれせし悲しさは命も絶るばかりで御ざりました」と、その大願が恋の成就を願ったものであること、しかし、それが成就しなかったことを明かす。具体的な内容は一切不明であるが、「大願」「ふかいおもはく」という重々しい表現が、それがなんであるかということよりもいかに強い思いであったかということを示し、前段で明らかにされた千之助のひたむきさを伝えるものとなっている。人生における蹉跌を経験したことで、「我身こそ前世の宿業によつてかやうのうき目にあひます共。せめては世に恋ある人のまもり共ならんと。身命をなげうつて世々の恋ある人の為に」足柄・箱根他の五明神に祈りを捧げたという口上を述べる。その結果明神から「連理の枝」を授かり恋の仲立ちをするようにとの託宣を得たというのである。そして舞台上から客席に向かって恋の成就を願う文を「連理の枝」に結びつけるようにと声をかける。

客の中に千之助に思いを寄せる備中の男がおり、自らの心中を書き付けた文を枝に結びつける。以下④では、その経緯と手紙の内容、備中の男への千之助の態度が述べられる。

手紙は「此月の十日にこの所に此すがたして此御返事をうけとり申べく候儘かならず／＼／＼や」と結ばれていた。楽屋ではみんながよってたかって手紙に興味を示し、その中に浅草に隠居する「我」もいるわけだが、手紙を自分のたもとに入れようとした九郎助なる人物にむかって千之助は、「我を恋てのふみ化^{ふみか}には」と言い放って、手紙を取り返す。それに対して、「我」は「せめてはと硯はやめてかきうつし帰」る。登場人物に関する情報の不透明感がよりいっそう周辺の人々の好奇心をそそっていることが、

急いで手紙を書き写したという「我」の行動によって具体的に表現されている。

その後千之助が手紙の主の家を探し出すが、その男は「備前より分ありて身を隠せし人¹⁶」だった。千之助は「子細聞までもなくひそかに我方に乞請」る。わけ有りの男をだまって自分の家に連れ帰り、そのわけを聞くこともせず、一夜を過ごす。「是にかぎらず又も」と再会を期して「心をこしける物」を手渡す。それが一体何なのかはやはりわからない。そしてそれぎり備中の男は行方がわからなくなる。その間の経緯は千之助は「人にかたらず」自分の胸中に封じ込めてしまう。そのことで彼は「ふかき情しり」と評される。

千之助が備中の男から熱烈な恋文をもらったことは、「我」を初めとする関係者や役者仲間の知るところであるが、その後千之助がわざわざ備中の男に会いに行ったことは読者に対してのみ示されている情報であり、事情が明らかでないことが千之助のミス터리アスな部分として周囲の興味を引きつけて止まなかったと理解できる。人々は最終的には千之助の草履取りを酔わせて「いっそやの文の終り」を聞き出す。

このように常に千之助に関してボールの掛かった表現がとられている。この話の場合にはそれを知りたがる「我」を含む周囲の人々の様子が描かれ、千之助を巡る情報を享受する層が、「我」に代表される作中の周辺人物と、作品の外の読者との二重構造になっている点で興味深い。しかし、いずれにしても作者は知りたがる人々に対して詳細を明白な形で語るといふ方法はとらない。意味深長な言葉によって千之助の周囲に謎めいた印象を与えるという表現方法は、大右衛門について述べる場合に用いられた手法と軌を一にする。共に、情報の濃淡を調整することで登場人物

のイメージやその周辺にかもしだされる雰囲気表現しようとしたものとは言えないだろうか。

四

ひとつの事件が起こったときに、その真相を知ることが難しいのは、いつの時代でも同じことである。また、情報が現実とずれて一人歩きすることは、時代を超えて、どのような共同体や組織においてもありうることである。たとえば、尋常でない事件が報じられたとき、人々は必ずといってよいほど「なぜ」「どうして」という問いを発する。「何でそんなことを?」「あの人が何故?」等、事件の背景や因果関係、真の理由などを詮索し、事件が難解であればあるほど、人はさまざまな論理を組み立てて、わからないと言ふことから来る不安感や恐怖心から少しでも早く逃れようとする。しかし、起こってしまった事件に対して「なぜ」と問うことは、覆水盆に返らずという意味で、無意味なことでもある。また、その問いに対する答えを、事件の当事者でさえはつきりと打ち出せない場合もあるだろう。理解を拒絶しているところにまさに事件の恐ろしさがある。

これまで見てきたように、『男色大鑑』巻一の五における丹之介毒殺未遂事件に関しては、大右衛門の「兼ての望」が何であるかが不明のまま、事件の謎が解かれていくが、結局その全容が、推理小説的にすっきりと解明されるわけではない。冒頭部の不透明な表現が作品全体を包み込み、そのわからなさが、一つの出来事や一人の人間を描いていく際に、実態感や存在感を深める方向に寄与している。

西鶴作品に常時つきまとう評価の割れも、ことばに与えられた想像の余地の在り方やその度合いが実にさまざまであることにそ

の要因が有るようにも思う。

表現上内容上の違和感をそのまま認めることが、西鶴の読みの方向性として至当なものかどうか、今後さらに範囲を広げて考えていきたい。

注

- (1) 清水脩三『戸隠の忍者』(一九八二・五、銀河書房) 参照。
- (2) 西鶴の作品の引用は、すべて中央公論社版定本西鶴全集所収の本文による。
- (3) 引用は、日本庶民生活資料集成第二十八巻(一九八〇・四、三一書房) 所収の本文による。
- (4) 『日本国語大辞典縮刷版』第七巻(一九八一・九、小学館)。
- (5) たとえば、染谷智幸氏「『男色大鑑』の唯美性と観念性」(論集近世文学3『西鶴とその周辺』一九九二・一一、勉成社)、同「西鶴と元禄のセクシュアリティ——女色と男色の対極性を中心に——」(『日本文学論叢』第二〇号、一九九五・三)、森耕一氏「西鶴作品の男色——『男色大鑑』と『好色五人女』を中心に——」(『園田国文』第一七号、一九九六・三) 等参照。
- (6) たとえば、浅野晃氏「『男色大鑑』の主題」(『西鶴論攷』一九九〇・五、勉成社)、井口洋氏「傘持つてもぬるゝ身——『男色大鑑』試論——」(『西鶴試論』一九九二・五、和泉書院)、篠原進氏「『男色大鑑』の〈我〉と方法」(『青山語文』第二七号、一九九七・三) 等参照。
- (7) 伴信友『人国記』(改定史籍集覧第十七冊所収)。
- (8) 堀章男「西鶴文学の地名に関する研究」第二巻(一九八八・二、和泉書院)。
- (9) 「夢野」(日本古典文学大系2『風土記』一九五八・四、岩波書店)。
- (10) 「西鶴と元禄のセクシュアリティ——女色と男色の対極性を中心に——」(『日本文学論叢』第二〇号、一九九五・三) 参照。
- (11) 同右。
- (12) 浅野晃氏「『男色大鑑』の主題」(『西鶴論攷』一九九〇・五、勉

成社) 参照。

(13) 一九九八年度本学国語専攻の国文学講読演習Ⅴにおいて、本話を担当した佐藤亜希子さんが、「兼ての望」がわからないことの違和感を指摘し、拙論に示唆を与えてくれた。

(14) 篠原進氏は、西鶴の浮世草子の方法のひとつとして「ぬけ」に関して積極的に論じている。「西鶴諸国はなし」の「ぬけ」(『日本文学』一九八九・八)、『本朝桜陰比事』の「ぬけ」(『青山学院大学文学部紀要』第三一号、一九九〇・二)、『西鶴の「ぬけ」』(国

文学研究資料館講義集15『西鶴―没後三百年―』一九九四・三)等参照。

(13) 篠原進氏『男色大鑑』の「我」と方法」(『青山語文』第二七号、一九九七・三)は、この「我」＝西鶴とはせず、「西鶴めかし」た「レトリックとしての」我と認定する。首肯すべきものと考え

(14) 右の篠原氏の論文では、この表現を『男色大鑑』の「ぬけ」の一つに数える。